

暁型は今日も元気です！

ノラ猫0329

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある小さな鎮守府の一室に彼女達は暮らしています。

これは、平和になった艦これ世界のお話――

目次

雷は愛されたい！	1
電は静かに暮らしたい 響 v e r	
9	
電は静かに暮らしたい②	14
司令官さんはあまりもてない	20
加賀は素直になりたい	26
司令官は忙しい	32
提督は忙しい	37
暁はれでいになりたい！	45
暁は実践する！	51
提督は呼び出される	57
ヲ級は局長です！	65

みんなは会議をする！	72
司令官は娘を紹介する	79
海色は囲まれる	85

雷は愛されたい！

「わたし……愛されたい！」

コタツでぬくぬくしているアタシの真ん前で

いつも元気！な雷がいきなり立ち上がり意味不明なことを
言い放った。

「え？どうしたのよ雷……！とうとう頭がおかしくなっちゃったのかしら!？」

「ちがうわよ暁姉！わたしは愛されたいだけなの！」

いやだから、それが分からないのだけど……

「雷はどう愛されたいんだい？」

アタシと雷の会話を見かねた響が雷に質問をする

「どうって……loveよlove! likeじゃないわ!」

loveか……結婚したいの好きよね?

い、雷もお年頃なのかしら?

「ほお……それで誰にloveしてほしいんだい?」

loveしてって何語よ……

「そりや電によ!」

アタシは飲んでいたお茶を吹き出した

ええそりや勢いよく!

ってか良かった! 電部屋にいらなくて!

「ななな何言ってるのよ雷! アタシ達も含めてみんな姉妹なのよ!?! しかも女の子同士なら……」

「だから何よ暁姉! もうねたまらないのよ! ずっと我慢してたけど無理よ! もう我慢出来ない!」

息をハアハアさせながら熱弁している雷を見て

若干引いているアタシにたいして響はプルプルしてる！

そ、そうよ！響！ガツンと言つてやりなさい！

アタシの思いが届いたのか響は勢いよく立ち上がり

「ふぎけるな雷……電は私のだ！」

と、叫んだ。

うんうん！それでこそひび……

「あんたもなの響?!」

「何を驚いているんだい姉さん？」

「だ、だつてあんたまで電をつて……」

「おや？もしかして嫉妬かい姉さん？ふふ……かわいいね？」

こいつ節操なさすぎるだろ!?

こんなチャライ人響じゃない！

「ふぎけないでよ響姉！電はわたし専用なのよ？」

「おやおやおかしな事を……電は私なの筈だよ？」

「いや、電はあんた達のじゃないでしょ……」

「まさか暁姉（姉さん）も電好きだったの（かい）!？」

「いやまあ嫌いじゃないけど……アタシはlikeだし……」

「わたし（私）はloveだし！」

何故か威張りながらはもらせて来て若干イラっと

したけどもう突っ込むのはやめよう……

「それでどうやったら電をメロメロに出来るかを一緒に考えて欲しいのよ！」

何か言い始めたよこの妹は!？」

「ふむ……敵ながらなかなかの提案だね。」

敵って何よ!? あんたら姉妹でしょ！

アタシもだけど！

「だいたい、あんた達はその…電とどうなりたいのよ？」

何か怖い質問だけど……まだ今より仲良くなりたい

ぐらいだと思いき質問してみる

「え？そりや……電をお嫁さんにしたい！」

「激しく同意！」

「どうやら、ゴールまで行きたいみたいだった！」

「む、無理に決まつてるでしょ!?女の子同士だし姉妹だし正直最難関よ!」

「暁姉……あまいね！日本以外の国ではその壁を超える場所があるって聞いたわ！」

「なに!?本当か雷！詳しく教えてくれ！」

「あんたら日本出る気なの!」

「愛に障害は付き物なのよ？暁姉？」

「大切な人のためなら祖国も捨てるさ」

「二人ともカツコイイけど……」

「アタシも別に女の子同士がダメだとは思わないけど……」

「って!」

「それだとアタシ一人ぼっちにならない!」

「大丈夫さ、その時は私が姉さんを引き取る！一妻多妻制を実現する！」

「1人は嫌だけどそれも何かいや!」

どうせなら1人にちゃんと愛されたい……っつて

アタシつたら何を!

「ふ……あまいわね響姉! 一妻多妻制聞いて呆れるわ!」

「……どうゆう意味だい?」

「電をお嫁さんにするにはそんな覚悟じゃ甘いつて言ってるのよ響姉!」

「っ!?!」

何だか嫌な予感が……

「わたしは女をやめるぞ!! 電ンンン!!」

「ま、まさか!?!」

「そーだ! ようやく気付いたかこのマヌケがあ!! 電をお嫁にしたいなら……建造するしかない!」

「えつと……雷? 何を……?」

何かもう怖いんだけど！

この妹怖い！

「何をだとお？……馬鹿か貴様は！」

「な、お姉ちゃんに向つてバカつて！」

「ナニをに決まつてるでしよお!!」

「……？いや、だから何つて何？」

ん？この子は何を言っているのだろうか？

何か響が顔真っ赤にしてぶつぶつ何か言ってるし

聞き返された雷も何か一時のテンションで

とんでもないこと言ってしまった！

みたいな顔してるし？

「だ、だから……ナ、ナニを」

「いや、だから何つて聞いているのはこつちなだけど……？」

「う、うわあああん！響姉！暁姉がいじめる！」

ええ!?!何で!?!

「よしよし雷？こつちにおいで？よしよし恥ずかしかつたね？可哀想に。」

え?え?アタシが悪いの?

い、いちょう謝らないと……お姉ちゃんとしては!

「ご、ごめんね雷?もう何って聞かないから泣き止んで?」

「まだいじめる!わあああん!!ヒックツグスツ」

「ええええ!!」

その後すぐに帰って来た電がこの惨状を見て
ため息混じりに怒られた……。

何か若干2名喜んでたけど(泣)

電は静かに暮らしたい 響ver

最近……お姉ちゃん達が変なのです…

戦争中はあまり気にならなかったのですが

明らかに変なのです！

平和になった世界なのに何故か危険を感じるのです！

い、いえ原因は分からないですし

気のせいかもしれないのですが……

「どうしたんだい電？」

電がコタツでそんなことを考えていると響お姉ちゃんが

話しかけてきました

「はわわ！な、なんでも無いのです。」

「ふうん……それならいいけど。」

あ、危なかったのです。

でも心配してくれる優しいお姉ちゃんなのです！

やっぱり変わってなんかかないのです？

「あ、電……質問したいんだけどいいかな？」

電がひとりで納得していると響お姉ちゃんが

真剣な顔でこちらを……つてはわわ！近いのです！

「な、なんですか？」

「日本を出る気は無いかい？」

「どうゆうことなのです!?!」

「いや、日本だと私のhappy endに持って行けそうにない。」

ま、ますます訳が分からないのです！

やっぱり変なのです!?

「響お姉ちゃんのはつぴーえんどってなんなのです?」

電がそう聞くと少し考えてから響お姉ちゃんは

口を開きました。

「イナズマをニイツマに作戦?」

「ニイツマ? なんなのです?」

ニイツマ……ニイツマ……電と似た名前なのです!

きつと改二のことなのですね!

響お姉ちゃんも確かロシア? で改装しました!

な、なるほどついに電も来たのですね!

「で、でも雷お姉ちゃんより先でいいのでしょうか?」

やっぱり雷お姉ちゃんより先はダメな気がするのです……

それか一緒にがいいのです!

「むしろ雷より先じゃないとダメだ! 私は負けられない!」

先じゃないとダメなのですか!?

た、たしかに響お姉ちゃんも長女より先だったのです!

暁型は②①④③な順番で改装しなきゃ

ダメだったのですか!?

し、知らなかったのです……でも

「平和になった世界でなんて意味あるのです?」

強くなる意味がない気がするのです……

「何を言っているんだい?そりや激戦時は燃えるかも知れない映画みたいなことになるかも知れない!でも平和な時こそそうすべきなんだ!」(ずっと一緒にいれるし!)

な、なるほど!深いのです!

平和な時こそその平和を守るために強くあれ

とゆうことなのですね!

さすがお姉ちゃんなのです!

「分かったのです!電、ニイツマになるのです!」

「っ!? 本当かい電! ならこうしちやいられない! さっそく準備しよう!」

「え!?! 今からなのです!?!」

「早いに越したことは無い! 少なくとも雷よりは早くここを出なくては!」

響お姉ちゃんが張り切って慌てて準備をしている時に
思いつきドアが開き!

《バリバリバリメキツ!!!》

「やらせはせん! やらせはせんぞお!!」
雷お姉ちゃんが入って来たのです!

電は静かに暮らしたい②

「甘いわね響姉！やらせはしないしやらせもしない！」

ドアを思いっきり開けて入って来た雷お姉ちゃんは

ドアをそつと閉じてから素早くこちらを振り返り

響お姉ちゃんに言葉を投げかけたのです！

とゆうかまるで電達の会話を聞いていたみたいなのです？

「くつ……遅かったか。でも雷？私は了承を得たんだよ？」

「ええ知ってるわ。聴いてたもの。」

やっぱり聴いていたのです？

でも、どうやって？

「でも、響お姉ちゃん？あなたは勘違いしてるわ！」

「か、勘違い!?……どうゆう意味だい？」

「ふっ……あなたは電について知らなさすぎると言っているのよ!!」

「だからどうゆう意味だと!」

ふたりは喧嘩しているのです!?

はわわ! 早く止めないと!

「電は新妻の意味を知らないのよ!」

電が止めようとした瞬間、雷お姉ちゃんから

出た言葉を受け止めた響お姉ちゃんは

見たことないような絶望した顔で膝をついたのです!

「ば、馬鹿な……」

「ふっ……電の純粹さを舐めていたようね! 馬鹿めと言ってあげるわ!」

誰かの名言? を真似した雷お姉ちゃんは

えっへん! と胸を張りました!

と、ゆうかニイツマを電が知らない？

「あ、あの……雷お姉ちゃん？電はニイツマを知ってるのです」

電がそういうと響お姉ちゃんは明るい顔を

しました！

「ふっ……次に電は「ニイツマは電改二のことなのですよね？」と言うー！

「ニイツマは電改二のことなのですよね？……ハッ！」

何故か先を越されていたのです!?

す、すごいのです雷お姉ちゃん！

でも、また響お姉ちゃんが膝をついたのです……

「ば、馬鹿な……そんなことって……あんまりだよ！」

「ふっ……そこはあんまりいいだあ!! って号泣してよ！」

雷お姉ちゃんはたまによく分らないことを言います……

暁お姉ちゃんの話だと漫画とアニメの影響らしいのです

「雷お姉ちゃんは色々知ってるのですね……」

「惜しいわ電！色々を何でもに変えてくれるかしら？」

「わ、分かったのです！雷お姉ちゃんは何でも知ってるのですね！」

「何でもは知らないわ…知ってることだけ。」

何だか分かりませんがすごく満足そうなのです！

「くっ……だがしかし！今意味を説明すれば！」

「おっと…それで何かが変わるとは思わないけどやらせはしないわ！」

はわわ！また、喧嘩するのです!?

な、なんとかしないと！

電がそう考えているとまたドアが開き

「ただいま〜ふえ〜……疲れたよお」

見回りに出かけていた暁お姉ちゃんが

帰って来たのです！

あ、そうなのです！

「暁お姉ちゃん？聞きたいことがあるのです！」

「ん？どうしたのよ電改まつて？」

「ニイツマつてなんなのですか？」

電がそうゆうとなぜそんな質問をされたのか分からず

すこし固まつた暁お姉ちゃんでしたが

響お姉ちゃんと雷お姉ちゃんの様子を見てため息をつき

「ニイツマつて言うのはおよ……ムグツ！」

暁お姉ちゃんが教えてくれようとした瞬間

お姉ちゃん達が暁お姉ちゃんの口を抑えました！

「な、なにモゴツするの二人とも！」

「ほ、本当の事教えてどうするんだい!?もしバレたら私は生きていけない！」

「そうよ！もしバレたらギクシヤクするじゃない！」

「た、確かにそうね！ごめん！だから離して！」

せつかく平和になったのに

まったく騒がしいお姉ちゃん達なのです……フフツ
電はうるさいお姉ちゃん達と静かに暮らすだけで
幸せ……なのです

司令官さんはあまりもてない

今日は久しぶりにみんな休み！
れでいーにも休息は必要よね！
と言うわけで今日はみんなで部屋でのんびりしてる……
のだけれど……

「はい、電あーん♪」

「あ、アーン……パクツモグモグ」

さつきから雷は電にポツキ○あげてるし

まるで餌やりみたい……

「……………イライライライラ」

それを見ながら響が殺意の波動に目覚めかけてるし……

「ふむ……これはやばいな。」

「そうなのよ……って司令官!？」

コタツで温まっていたアタシの後ろに司令官が

立ってた!びつくりした!

「し、司令官!れでいーの部屋よ!ノックくらいしてよね!」

「れでいー?……どこだ!早く紹介しろ!」

アタシがそうゆうともものすごい速さで首を左右に

振りながら探してる……失礼な!

「ふむ……嘘は良くないな暁!居ないじゃないか!」

「居るじゃないここに!」

「俺の目の前には童女しか居ないが……?」

「誰が童女よ!立派なれでいーじゃない!」

「まあ確かに将来的には……」

「未来じゃなくて今でもよ！ぶんすか！」

いつもいつも！バカにしてえ!!

この女たらし底辺司令官め！

アタシが司令官といつものやり取りをしていると
いきなり3人がジト目でこちらを見て……

「独り占めは良くないのです……」

「あら？司令官にはわたしが居るじゃない？」

「あは……あはははは♪」

怖!?

特に響こわ!!

「あんた達ね……」

「あ、そうだ！みんなにお土産があるぞ！」

「また、どこかに行つてたの？」

「ああ加賀に任せてな。」

司令官はあまり自室から出ないで

秘書官の加賀さんにその日の予定を知らせている。

この鎮守婦の表の司令官と言われている

その司令官はたまにこっそり出かけている。

「それでお土産って?」

「ああクツキーだ!」

司令官はそう言っただけでかわいいクツキー
を取り出した!

わあくお花とかハートとかかわいい!

「かわいいのです!」

「ありがとう司令官!」

「すばしーば!」

3人とも機嫌が治って良かった……

「それにしても、今回はどこに行ったの?」

「ん……まあ気にするな。」

また教えてくれない……とゆうかよく見たら

「このクツキー手作りなのね？」

アタシのその言葉にまた3人が……いえ

私も含めて全員が司令官を見て

「……誰に貰ったの（です）？」

「……なんだその圧力は？」

「……いいから答える（のです）。」

「……さて、そろそろ戻……」

戻ろうとした司令官を私達は押さえ込んだ

「な、何をするだあ!!」

「ジョジョか！行かせないわよ司令官！」

「誰から貰ったか白状するのです！」

「お、お前らどけ！痛い！」

「おや？重いといいたいのかい？」

「失礼しちゃうわ！」

「ち、違う……お前ら艦……娘だから力が！って雷どさくさ紛れにどこ触ってやがる！」

「建造する時の参考に……」

「ナニを生やす気だ!？」

その後10分程抑え込んで問いただしたけど

結局教えてくれなかった……

ぐぬぬ……気になる

加賀は素直になりたい

「私…愛されたいのよ」

いつか聞いたような言葉を今度は加賀さんが
発していた…

「えつと…ちなみに誰に？」

私がきよとんとしていると

雷が質問してくれた。

「提督よ？それ以外に誰がいるの？」

さも当たり前前みたいに言われた…

私には電も姉さんもいるけどね！

「で？…それを私達に言っとうするんだい？」

「手伝ってほしいのよ。」

「何を？」

「提督との結婚計画を。」

「断る!!」

何を言ってるんだこの人は!?

私達の気持ちも知っているだろうに!

「私達になんのメリットがあるんだい？」

「頭を撫でてあげるわ。」

「メリットじゃない!」

「シャンプーがいいの？」

「そのメリットじゃない!」

「か、加賀さん？わたし達も司令官好きなのよ？知ってるわよね？」

「ええ、知ってるわ雷さん。だから？」

だからって言われた!

なんだこの人!

「いや、そんなわたし達に頼むのは酷いんじゃない？」

「確かにそうね……考えてなかったわ」

考えてなかったんだ……

いつもはしっかりしてるのに司令官絡むと

ポンコツだな……

「でも、確かあなた達電さんも好きなのよね？」

「ぎくっ！」

「ぎくっつて言う人初めて見たわ。そう本当だったのね。なら負ける気はしないわ。」

「な、何を！」

「だって私は提督集中砲火だもの。」

空母なのに！とツツコミを入れようとしたがやめた。

「空母なのに!?!」

あ、雷は我慢出来なかったみたいだね……

「提督の性食権（せいこうけん）はいただくわ。」

「何か字が変じやなかった!？」

「あら、字ってどう言うことかしら？ 私達は言葉で会話をしてるでしょ？」

「うぐっ……確かにそうねごめんなさい。」

雷はそうゆうと少しだけしよんぼりした。

ふむ……雷もかわいいなやはり。

いつそのことみんな貰いたい！

「響さんあなた節操無いわね。」

「な、何のことだい？」

私が聞き返すと見たことないような笑顔で笑った。

何か怖い！

「ともかく、私は提督に愛されたいの。」

「そう言われても……「ねえ？」」

私達はお互いに顔を見ながら困ったように笑った。

確かに加賀さんにはお世話になってる。

けど司令官が誰かのものになるのは

やはり辛い……

「……手伝ってくれないなら構わないわ。最終作戦を使うから」

「さ、最終作戦？」

「ふふっ子供には刺激が強すぎる作戦よ？」

「？」

刺激が強い？

……は!?まさか司令官の後ろから抱きつくとか!?

くっ!それは羨ま……けしからん!

「司令官には抱きつかせはしない!」

「あら?抱きつく?何のこと?」

私が思っていた反応と違う感じが帰って来た。

「ともかくありがとう。今夜はみんな早く寝なさい。」

「い、いいえ……つてなんで？」

早く寝なさい？

私達結構早いと思うけど……

「子供には刺激が強すぎるからよ。」

そう言つて加賀さんは出て行つた。

司令官は忙しい

戦争が終わって1年……早いような長かったような……

戦争は3年で終戦し深海棲艦にも艦娘にも

多くの被害が出た。

終戦後生き残った艦娘と深海棲艦は協定を結び

平和を取り戻した。

表向きは……な。

そうあくまで表向きだ。

完全な平和など無い。現に深海棲艦側の納得していない

者達が戦力を集めているなんて物騒な話もある。

まあ、あくまで噂だが。

そう……まだ戦争は本当の意味では終わっていない。

少なくとも……俺の中では。

「なんてな……ふあゝ……眠て。」

らしくないことを考えるもんじやないな……

まったく……

にしても暇だな……加賀は出掛けてるし

他のメンバーも誰も来ないし……

書類も終わったしやること無いな……

「ゆつくり仕事すれば良かったな。」

せめて加賀が居れば出掛けられるんだがな……

……くそ。

「流石に鎮守府に誰も居ないのはダメだもんな。」

ああ！誰か遊びに来いよ！おじさん暇に殺されるぜ！

俺が悲痛な叫びを心から発したお陰かは分からないが

ドアが開き。

「こらこらノックぐらいしないか。……どうぞぞ」

「司令官！遊びに来たわよ!!」

そう言っつていつも元気な雷がドアを開けて椅子に座っていた俺に突進してきた！

「ぐぼら!!」

「あはは！司令官！司令官！わあーい！」

追突され倒れた俺に抱きつき頭を胸にぐりぐり

しながら雷が喜んで

「わ、分かった！嬉しいのは分かったから離れなさい！色々とまずい！」
さすがに今の状態はまずい！

主に犯罪的な意味で！ちくしょう！ただでさえ今は

規制が厳しいんだぞ！俺は大人の意味で冷や汗が出るわ！

「ええ〜司令官……もしかして？」 チラツ……チツ

何故下半身を見て舌打ちした！

お前の存在はもはやR指定がいるな！

子供に変な気持ちにはならん！ならんたらならん！

「ちえ……司令官つまんない！薄い本みたいな展開にならないじゃない！」

「お前にそういう知識を植え込んでるやつは誰だ！今すぐに飛ばしてやる！」

辺境の地にもな！

「ん？大抵は漫画とかアニメ？」

あ、ああ良かった（？）……

そういうのの影響か。

確かに最近の漫画はそういうネタ多いしな。

「まああれだ覚えた知識を使いたいの分かるが……気をつけるよ？」

「……？イマイチよく分からないけど分かったわ！じゃあね！」

……何をしに来たのか分からなかったけど

満足そうに帰って行った……やれやれ。

俺は再び暇になりどうしようか考えていた。

▪ コンコンツ ▪

するとドアをノックする音が聞こえ

「……………」

招き入れるとそこには加賀が立っていた。

「提督？お話があるのだけど？」

提督は忙しい

何だ……改まって加賀のヤツ？

な、何かしたか俺!?

「提督?」

俺が考え事をしていると心配そうに加賀がこちらを見ていた。

「あ、ああ何でもない。で聞きたいことって?」

まあよくわからない時は聞くのが一番だ。

加賀の事だし訳の分からないことは言わないだろう。

「提督は好きな子いるのかしら？」

.....!?

「ごめん……何だつて？」

「難聴系主人公なのかしら提督は？」

何だよ難聴系つて？ジジイの主人公か？

「ですから……好きな子はいるのつて聞いたのよ。提督」

「好きな子つてのは……どういふ好きなんだ？大切つて意味なら俺は嫌いな奴が逆に居ない。」

俺は無意識になにかから逃げるようにしていた。

無意識……？

いや、意識はしている。

無意識を意識している。

無意識にそうしていると意識している。

その正体は無意識なので分からないが……

「ですから……」

焦れつたくなつたように加賀がこちらに迫つて来た
ゆつくり、しかし逃がさないように

逃げ道を塞ぎ警戒されるかされないかのギリギリの
心配を出しながら

「……大切な人はいるのかと聞いています。」

加賀ははつきり……そう言った。

「大切な人か…」

「そうです提督……で？どうなんですか？」

「ここまでグイグイ来る加賀初めて見たな……」

「これはこれで悪くない……が」

大切なかけがえの無い人。

すべてを掛けてもいいと思える人は……

「居るよ。」

「そう……それは私では無いのよね？」

「そう。君じゃない。」

「……分かりました。」

「大切な娘がね。」

「そう……………ん？今なんと？」

「君も難聴系かい？」

「いえ……………何だかおかしな言葉が聞こえたもので……………もう一回お願いします。」

「だから大切な娘がいると言ったんだ。愛してる人とはすこし違うかもしれないが一番大切なという意味では合っている」

「ぼかーん」

ぼ、ぼかーん？

初めて見たぞ……………ポカンと言ってる人なんて……………

「提督……………結婚してたんですか？」

何かフルフルしながら聞いてきたぞ？

大丈夫なのか病気か!?

「い、いや結婚は一回もしたことないぞ？」

「はー、よ、養子ってことですか？」

独り身なら子供がいても大丈夫！

と小声でいいながら無表情でガッツポーズをしている

加賀を見ながら俺は……

「いや、養子って理由でもない。……まあ色々あるんだ気にするな。」

俺はそう言いながら加賀を撫でて

……何かを誤魔化した。

そう。知られたくないことを

都合の悪いことを。

……知られてはいけないことを

誤魔化し隠した。

「て、提督……そろそろやめてください。照れますので」

「あ、ああすまない。って……て、照れるの？」

「照れます。」

「そ、そうか。」

「聞きたいことが聞けたので今日のところは勘弁してあげましょう。」

「それはどうも。」

「今度、娘さんにあわせてくださいいね？」（将来のお母さんとしては今のうちに……）

「……ああ必ず。」

俺はそう言った。

「では。」

加賀はそういうと部屋を出て行った。

明日また出掛けよう。

加賀に……いや、みんなにあの困った娘を

会わせるために。

「明日また行くよ。海色（あおい）」
俺は誰も居ない虚空に向って呟いた。

暁はれでいになりたい！

アタシは暁！ごく普通の1人前のれでいよ！

アタシが歩けば男の子は振り返り！

アタシが笑えば女の子は笑う！

まさにすべてを魅了するばーふえくとれでいよ！

でも何故かみんなは認めてくれないの…

みんな頭をなでするの！

れでいの頭をあまり撫でちゃいけないのよ！

髪型が崩れるじゃない！ぷんすか！

だから今日からアタシは更なるすてーじに上がる！

すーばーばーふえくとれでい！

ふふふ…：…見てなさい！！ぎやふんと言わせちゃうから！

と、言うわけで…：

「助けて電!!」

「どういうわけなのですか!?!」

【少女説明中】

「な、なるほどなのです……でもそういうことは電より響お姉ちゃんの方が詳しいと思うのです」

「そうね……アタシも本性を知るまではそう考えてたわ。」

「いえ……あなたはアタシ達姉妹の中でもNo. 2のれでいよ! ベジー○ポジションよ!」

「何か今のはキャラ崩壊とさらに強いのがいるらしいけど」

「そんな電にどうしたら更に上を目指せるのか聞きたいのよ!」

「わ、分かったのです！ 暁お姉ちゃんのためにがんばるのです！」

「流石ね！ 頼りにしてるわ！」

こうしてアタシ達の戦いは始まった！

ふふふ…見てなさい司令官！ メロメロにしてあげるんだから！

電 s i d e

という訳で暁お姉ちゃんをれでいにする作戦開始
なのです！

正直電はカワイイから暁お姉ちゃんはそのままでも
いいと思うのですが頼まれたからにはがんばるのです！

「それで何をすればいいのでしょうか?」

「それが分からないから電に聞いたんじゃない……」

その通りなのです……

ん〜…どうすればいいのでしょうか?

電だつてけてして大人な女性じゃないのです…

適当には言えないのです…

あ、そう言えば…

「まずは話し方から変えてみるのはどうでしょうか?」

「話し方?」

「まずはアタシじゃなくてわたしにするのです」

「分かったわ! やつてみる!」

そういうと暁お姉ちゃんは立ち上がり

大人っぽいポーズ(それぞれが思うのを想像するのだ!)
をしながら

「わたしは暁よ！一人前のれいでいとて扱ってよね！」

つと非常に満足そうな顔で言いました。

でも……

「なるほどなのです……」

「ん？何か分かったの電！」

「はいなのです……暁お姉ちゃん」

「何かしら？」

「まずれでいアピールをやめてみるのです」

「!？」

何だかすごい驚いてるのです

「いや、でもさ電？アタシ見た目子供だからアピールしないと……」

「逆に大人の女性が子供扱いして欲しくて子供なのですアピールしても子供には見えな
いのです。それと同じなのです」

「うぐ……で、でも」

「本当の大人の女性は例え見た目が小さくても心からレディーなのです!」

「Σ(。□。;)」

すごい驚いてるのです!

「た、確かにそうね!アタシ!もうれでいとか言わない!」

「じゃあ、今回のことは終わりなのです。暁お姉ちゃんファイトなのです!」

「分かったわ!ありがとう電!」

そういうと暁お姉ちゃんは部屋を飛び出して行きました。

「まだ時間はあるのです。ゆっくりと大人になって欲しいのです。」

自分で気がつくのも大人への1歩なのです♪

暁は実践する！

「電に相談して正解だったわ♪早く司令官に会いに行こう！」

「人前のれでいとしては告白じゃなくて告白されたい

ものね！今日こそ大人の魅力でメロメロにしちゃうんだから！

つと着いたわ……ふえ〜緊張するよ……でも！

《コンコンツ》

「どうぞ。」

ノックをすると司令官の声が帰ってきた。

「さあ……シヨウタイムよ！」

「し、失礼するわよ司令官。」

「暁か……どうしたんだ？」

「いえ……えつと……」

「あ、慌てるんじゃない！」

暁型はうろたえない!

「司令官に会いに来たのよ?……邪魔?」

男の人は上目遣いに弱いらしいわ!

そして遊びに来たでは無く会いに来たと言う事で

ただ会いたかったみたいない意味深感をプラス!

ふふふ……我ながら完璧だわ!

「暁……おまえ」

「(*、▽、*)」

「そんなに暇なのか?」

「(・ω・)」

何でそうな……るわね確かに……。

そうなんだけど、そうじゃないのよ!

「司令官に……会いたかったから暇を見つけてきたのよ……」

ここは泣き落とし? 作戦よ!

と、とりあえずたぶん泣いた感じにすればいいのよね!

「シクシク……メソメソ」

「暁……お前」

足音が近づいてくる……やだやだドキドキする

しばらくし足音が止まると頭に暖かい感覚が広がり……

ってイタタタタタタタ!?

「暁さんどうしたのかしら?」

「か、加賀さん!」

「あら?なにを驚いてるのかしら?私は秘書官よいるのは当たり前でしょ?」

「た、確かに……」

くっ……全然考えてなかったわ!

とゆうか加賀さん力強い!頭痛い!

「痛いから離して〜!」

「痛い?それは先程までの芝居のことかしらでいさん?」

「違うわよ!頭が痛いのよ!」

「私もさっきの演技で頭が痛いの……だからお互い様ね?」

すっごい笑顔で言われた!

頭握りつぶそうとしながら笑顔で言われた!

「加賀、そのへんにしとけ。」

「分かったわ。」

すんなり離れたわ……分かってたけど。

「まったく……つとそろそろ時間か。」

加賀さんに注意した司令官が時計を見て

何かを思い出したように立ち上がり

「悪いな暁、また遊ぶのは今度にしてくれ……すまんが加賀あとは頼む。」

そういうと掛けてあったコートを羽織り出ていった。

「え!? 待ってよ司令官! もう……何なのよ」

「……………提督。」

司令官が出ていくときさみしそうな顔をし

司令官の机に向かい。

「これよりしばらくの間提督代理をします。暁さんすみませんがみなさんにお伝えください。」

そういういつもの雰囲気に戻り椅子に腰掛け

「分かったわ。加賀さん」

流石に居づらいので部屋をあとにした。

司令官 s i d e

この時間が無い時に何のようだ？

……まさか感づかれたのか?
……仕方ない。

今は向かうとしよう

老兵のさばる海軍本部に

提督は呼び出される

部屋を出た俺を本部の命令で遣わされたであろう

男ふたりが鎮守府の海岸で待っていた。

ビシツとしたスーツを着こなした威圧的にこちらを見つめ

「結喜准将ですな？ お待ちしておりました。どうぞこちらへ」

提督や司令官と呼ばれすぎて一瞬自分が呼ばれたことに

気付かなかったが言われるがままに船に乗り込んだ。

「今回は何のようなのかな？ わざわざ本部からお迎えまで寄越してさ。」

「すみませんがお答えできません。」

「ですよね……」

答えられないと言うより知らないのだろうか。

さて……なかなかめんどくさい事になったな。

流石に逃げるわけにはいかんし……

まあ……誤魔化すしかないだろうが。

そんなこんなを考えていると

本部が見えてきた。

「ずいぶんと早いな。まだ1時間くらいしかたつてないぞ？……前まで2時間は余裕で掛かってたはずだが？」

「日々進歩していると言う事です。あなたが抜けた今でも」

「さいですか。」

艦娘の儀装が元なんだろうな。

しかしただの船に護衛も無しとは本当に平和になったんだな。

もしくは攻撃されたらそれはそれで……と言うことか。

・コンコンツ・

「入りましたまえ。」

「失礼いたします。」

船で早々に着いてしまった俺はスーツ男に案内されながら

元帥殿の部屋に案内された：元帥かまじかよ

「結喜准将です！ただいま到着致しました！」

「うむ……苦勞……座りましたまえ。」

俺は椅子に座り窓を見てこちらを全く見ようとしない

元帥の言葉を聞き高そうなソファに座った。

「あの……今回はどう言ったご要件でしょうか？」

重たい空気をヒシヒシと感じながらついに耐えられなくなり話しかけた。

「海色……と言えば分かるかね？」

海色……その言葉を聞いた瞬間すべてを理解した。
バレている……あの子のことが。

「……分かりません。」

誤魔化せ

「そうか……君の娘だろう？」

「私に娘はいません」

誤魔化せ

「思い出したくないか？」

「最初からいけません。」

誤魔化せ

「2年前のことを」

「私はここで科学者をしていましたね。」
誤魔化せ誤魔化せ誤魔化せ！

「海の底に沈んだあの娘のことを」

「…」ドクンドクンッ！

「すべての始まりのあの娘のことを」

「やめ……」

「戦争の開幕を告げたあの日のことを」

「やめてください!!」ハアハアッ

心臓が飛び出そうだ。

血管がはち切れそうだ。

脳が砕けそうだ。

体が発火しそうだ。

怒りで憤りで悲しみで……

「……すまん。歳をとるといらんことばかり言ってしまう。」

そう言うと元帥はこちらに歩み寄り
俺の目を見て

「そつちよくに聞こう。あの娘……海色はどこにいる？」
ドスの聴いた声で見下げながら言った。
恐怖で口を開きそうになるが言葉を飲み込み。

「……あの娘は沈みました。もういません。」

「……それが答えか？」

「はい。」

「……残念だ。」

「居たとして……」

「ん？」

「居たとして見つけてどうするのですか？」

「……あの娘はすべての始まり。可愛そうだが処分するしかない。」

「それが聴けただけで充分です。」

俺はそう言うのと立ち上がり

「失礼します。」

「……それが嫌なら。」

俺が扉に手をかけた瞬間に元帥が口を開き

「それが嫌なら証明して見せろ。貴様の娘の無害さを。」

「どうやって?」

「簡単だ。鎮守府で生活させろ。」

「なっ!?!」

「鎮守府で生活をさせてみて何も無いなら無害だろう。失敗しても一つの鎮守府が無くなるだけだ。」

元帥は優しい口調で残酷に告げた。

「こちらにもリスクがある以上貴様にもリスクを背負ってもらおう。当然監視は付けるがな。おい入ってこい。」

元帥がそう言うのと部屋の奥の扉から銀髪の少女（ビッグサイズ）が現れ

「駆逐艦……浜風です。」

「駆逐艦ではあるが非常に優秀な艦娘だ。対人訓練も受けている。彼女なら適任だろうからね。」

あの娘を鎮守府に置くだけでも大変なのに

監視までとは……これは大変なことになりそうだ。

「では浜風よろしく頼む。そして結喜君……まあ頑張りたまえ。できる限りの助けはしよう。」

そう言うと元帥は奥の部屋に入って行った。

「今日から宜しくお願いします提督。」

偉いことになりそうだ……

俺は頭を抱え本部をあとにした。

ヲ級は局長です！

司令官と遊べなくて凹んだアタシはトボトボと
部屋に帰った。

確か今日は電がお休みだったはず……
癒してもらおう！

「ただいま〜」

アタシが部屋のドアを開けると目の前には癒しの電と

「おかえりなのです！」

「ナノデスナノデス」

「何であなたがいるのよ!?!」

技術開発局局長のヲ級さんがいた!

「ナンデツテヒドイナ……イヤシガホシクテキタンダヨ?」

どうやら電は深海の人にも癒し効果があるらしい……

って言うか!

「その片言やめなさい!あなた普通に話せるでしょ!」

「……いや、初登場だしキャラ付けをしようかと」

「何の話!」

昔は片言だったけど今は訓練をして片言を治したらしい

「……じゃあせめて語尾だけでも片言にするヨ?」

謎のこだわりですよその技術開発局局長みたいになつてる!

「これはなかなかいいネ♪変換が面倒だけどネ」

さつきから何を言っているんだろうこの人は……

「飽きてきたヨ……あと大変だからやめるヨ……」

あ、やめるんだ……

「もうキャラ作るの疲れたかは素でいくね?」

「……自由どうぞ。」

癒されに帰ったのにちよつと疲れた……

「あ、暁お姉ちゃん？立ったままは疲れるのです……座ってなのです！」

そうゆうと電は座布団を部屋の端から持つて来て

机の横に置いてくれた……ちよつと泣きそう

「ありがとう電……ウルツ」

「涙腺だけはレディを超えるな！」

「誰が涙腺おばあちゃんか！」

「涙腺おばあちゃんってw」

何故かツボってるヲ級さんはほつといて……

「そう言えば暁お姉ちゃん司令官さんに用があつたんじや無かつたのですか？」

「それがね……」

??少女説明中??

「なるほど……またどこかに行ってしまったのですね?」

「そうなのよ……」

「で?……抜け駆けしようとしたと?」

「そうなのよ……ん?」

「ふくん……なのです」

な、何かすごい睨まれてる……

「電ちゃん抜け駆けとはなんなの?」

「いけない事……なのです♪」

なんか怖い!背景にゴゴゴゴゴゴって見える気がする!

「でもまあ許すのです。何も無かったみたいですし」

「うぐっ……」

「それにしても司令官は何処に行つたんだらう？」

「分からないわ……いつもと同じで」

「今度は女の子を連れて帰つて来たりしてね！」

「そんなわけ無いでしょヲ級さん」

「流石に無いと思うのです」

「だよね〜」

「「H A H A H A H A」」

『『無いとは言えない気がする（のです）』』』

「さ、流石にもう来ないでしょ？」

「なのです！」

「ここは小さい鎮守府だし人は足りてるしね！」

流石にこれ以上ライバルは要らないんだからね！

アタシ達が謎の慰めあいをしているとヲ級さんが

急に立ち上がり

「……!!司令官の○圧を感じた！」

「霊〇って何!?!」

司令官は死神じゃない!

「司令官の〇圧を耳の盗聴器に感じた!」

「それは〇圧じゃないでしょ!?!」

盗聴器!?!なんてもものつけてるのよ!?!

「静かにしてれでい (笑)」

「(笑) を付けるな!」

「……………二人とも落ち着いて聞いてね?」

「な、何よ?」

「司令官さんに何かあったのです!?!」

「重大事件よ……………」

な、なによ……………司令官に何かあったの?

早く行かなきゃ……………」

「女の声がある! しかもビッグボインっぽい声が!」

「「な、なんだってー (なのです) !!?」」

ん？ビッグボイン？

みんなは会議をする！

話をするわ……あれは今から36万……いや

10分と30秒前だったか……まあいい。

わたしにとってはさっき聞いた話だけど

君たちにとっては……

雷「前話の出来事だ。」

暁「どうしたのよ雷？」

ドヤ顔でナレーションを終わらせたわたしを見ながら

暁姉がわたしに？の目線で見つめてきた。

加「そんなことを気にしている場合では無いわよ暁さん」ギロツ

暁「す、すみません……」シヨボンツ

ヲ「では今の状況をお復習するぞ？」

すねた暁姉はほつといてヲ級さんが今の危機的状況を

再び説明し始めた

ちなみにわたし達は今司令官室にいるわ！

暁姉から聞いた加賀さんに放送で呼び出されて！

ヲ「私の情報ではあのたらしがどこから女を連れてきたようだ。あのたらしがな

！」

加「ありがとうヲ級さん……間違いないのね？」ギロツ

すつごい怖い顔で加賀さんが聞いている……こわい

ヲ「私の盗聴器に間違いはない……今は何故か聞こえないが」

加「まあ盗聴器の件に関しては今回は見逃しますが……間違いないようですね。」

電「もしかしたら気付かれたのでしょうか？」

ヲ「そうかもしれないわ……でも最後に聞こえたのが10分ちよつと前だから……やつが到着するまで猶予は少ないと思う」

加「範囲広いのですね……今度ください。」

響「私もほしいな！」

雷「わたしも！」

欲しいに決まってるわ！

ヲ「仕方ないな……用意しよう。だが」

加「今はそれどころでは無いね。」

響「そのとおりだ。」

加「他に情報は無いのヲ級さん？」ギロツ

ヲ「ふむ……同伴している女はボインだと思われる」

加「ボ、ボイン？」

流石の加賀さんも何言ってんだこいつみたいで顔で

ヲ級を見ている。

暁姉は首をかしげている。

それ以外の子は下を向いてため息をついている…ボインって

加「なぜ、そう思うの？」

ヲ「盗聴したらボインボインって聞こえたのだ」

加「マジで！……じゃなかったわ。驚きすぎてキャラが飛んでしまったわ…危ない危ない。」

加賀さんのキャラが壊れるほどの衝撃！

ボインボインって聞こえるってどういうこと!?

ヲ「いや、すぐかった！船が揺れる度にガタンツ！ボイン！ガタンツザバン！ボインバイーン！って音が！」

そんだけ揺れるってことは戦艦？

戦艦か…正面からじゃ勝てないわね…

暗殺しようかしら。

響「い、雷？目が怖いわよ？」

わたしが暗殺を考えていると心配した顔で響姉が聞いてきた。

雷 「大丈夫よ響姉……バレないようにするから」

響 「何をだい!？」

ヲ 「殺せるといいですね〜ヌルフフ」

暁 「ヲ級さんいきなりどうしたのよ!？」

ヲ 「誰かの心の声が聞こえたので反応してみました!」

電 「でもこれからどうするのです?」

加 「ポインに関しては私は大丈夫だけれどライバルが増えるのは辛いわね」

一同 「イラッ」

加 「口に出てるわよ皆さん。」

雷 「そりや出ますよ!」

電 「なのです!」

響 「まったくだ……」

暁 「そうよ……」 ショボンツ

ヲ 「私は美しい!……し!」

加 「まあ男性だし仕方ないわね」 バインバイン

ヲ「いや、このタイトルで見に来てるなら小さいのがたまらなくいい！つて人もいるはずだ！」

電「タイトルって何なのですか!？」

響「まあ胸の話はやめよう…私達は希望があるけどヲ級さんが可哀想だし加賀さんはあとは重力との戦いだし」

ヲ「誰が可哀想か！いいもん需要だらけだもん！画像検索してみろよ！めっちゃ引つかかるから！」

加「ど、努力してるもん」

雷「もういいわ！」

しつこい！

加「ごほん…まあ実際見て見ないとどうしようもないわよね、実際」

ヲ「確かにな。」

第六「そうね(なのです)」

加「なら各自戦闘態勢! どうせ提督はここに来るのだから迎え撃つわよ! 新たな艦娘(ライバル)を!!」

ヲ「私にかかれば一撃だな。」

暁「どんな子かしら?」

響「バインバインのライバル……」ガクツ

雷「毒?……いや艦装に細工を……」

電「なんだか……心配なのです……いろんな意味で」

《ガチャツ》

司令官は娘を紹介する

電達が戦う覚悟を決めた瞬間司令官室のドアがあき
司令官さんが帰って来たのです

結「ただいま〜ふい疲れた。」

そう言いながら司令官さんは手で顔を扇ぎながら
入って来ました。そして後ろに目をやると手招きをし

2人の女の子を……ふた……りの

「「「「ふたり（なのです）!?!?!」」」」

1人ではないのですか!?!
ちよっと待つのです!

加「お、おかえりなさい……えつと……あら？」

加賀さんも混乱してるのです！

ヲ「おいタラシ男……説明してもらおうヨ？」

ヲ級さんは混乱を乗り越えて目が座ってるのです！

結「タラシつて……やめろよ誤解されるだろ？」

そう言うとき司令官さんは2人の女の子を見ながら

言いました。え？なんなのですか？

本命なのですか？ナノデスカ？

暁「い、電？目怖いわよ？」

お姉ちゃんが心配そうに見ているのです。

電は大丈夫なのです。

とても冷静なのです。

響「司令官？……誰なんだいそいつ……その子達は？」

雷「ずいぶん大切そうねウフフ？」

ほら、みんな冷静なのです。

さすがお姉ちゃん達なのです。

暁「うわあ……」

結「そうだな……紹介しよう。頼む」

司令官さんがそう言うと言方の……おそろく盗聴器で分かった女の子……すごく大きい……のです。

浜「はい。海軍本部より本日付でこちらの鎮守府に着任します浜風です。よろしくお願いたします。」

本部の方でした……

手強そうなのです……

加「わざわざ本部からこちらに来るなんていったい何をしでかしたのかしら？」

結「いやいや飛ばされたわけじゃないからな!？」

ヲ「では、なんなのかな？」

結「そ、それは……」

浜「すみませんが詳しい内容は言えません。」

おどおどしている司令官さんを見かねてか

浜風さんが冷たく言い放ちました。

雷「言えないことなの？」

浜「ええ。少なくとも小さな鎮守府の1艦娘には過ぎた情報よ。」

雷「あら……そう？」

雷お姉ちゃんが何とか怒りを鎮める中

司令官さんはもう一人を手招きで呼び

結「浜風それぐらいにしとけ。さて……じゃあ挨拶してみな？」

険悪なムードを放っていた浜風さんを一喝し

もう1人の女の子の背中を押しして

海「……海色（アオイ）です。よろしくです」

おどおどしながら挨拶をする女の子

青肩まで伸びたストレートの髪に垂れた水色の目
真っ白なワンピースと……何とも儂そうな子なのです。

ヲ「ふむ……完全に作者好みだな。」

暁「何を言ってるのヲ級さん？」

海「ユウキ……これでいい？」

呼び捨てなのです!?

うらやましいのです!!

響「すでにそこまでの仲にギリッ」

加「……うらやましい」

ヲ級「恐ろしい子っ!」

暁「名前呼びなんてすごいわ! れでいだわ!」

結「ああよく出来たな。」

そう言うとき司令官さんは海色さんの頭をなでました

………うれしそうな顔なのです。二人とも

加「その子も本部の子なのかしら？」

加賀さんは何とか無表情を保ちながら聞きました

結「ああ、いや、この子は……………」

何か言いにくそうなのです煮えきらないのです！

やっぱり彼女さんなのですか！デスカ！…………ウウ

結「この子は娘だよ俺の」

「「「「「娘えええさん（です）！」「「「「「」

浜「ふん…………」

海色は囲まれる

ユウキに連れてこられて挨拶をしてから
さっきの女の子達にニコニコ笑いながら部屋に誘導
されて……

海「あの…アオイはどうしたらいいのでしょうか？」
あまり広くない畳の部屋の真ん中にあつたコタツを
のけてまさに真ん中に座らされて文字通り囲まれてる……

海「あの…あの…」
こんなに居るのに無音なのが怖い
誰から話すか悩んでるみたい。

海「用がないなら帰ります。あまりユウキのそばを離れるわけにはいかないので。」

(そうそれがルールだから。)

アオイが立ち上がろうとすると優しく方に手を置かれ

加「まあ落ち着いて。」

ヲ「取って食べるわけじゃないヨ」

雷「そうよ！ ゆっくりしたらいいじゃない」

電「なのです！」

響「私が新しいママ（ゴモツ）！」

暁「何口走ってるのよ！」

何がしたいのでしょうか……理解不能です。

理解したくもないですが

海「あの……アオイにあまり関わらないで欲しいのですが」

ユウキがないと不安だし……

少し強めの言葉を選べばほっといてくれるでしょう。

加「鎮守府の仲間じゃない。仲良くしましょ？」

海「仲間？」

仲間「仲間か」

海「アオイの仲間はユウキだけです。」

ヲ「あいつは父親だろ？仲間なのか？」

海「ユウキは仲間。」

加「そう言えばそんな風な話を前に聞いた気がするわ娘がいるけどどうたらって」

ヲ「何故それを報告しない！ホウレンソウだろ！」

加「ここは会社ですか？」

ヲ「まあ…そうだろ？ちよい違うけど仕事場ではある」

加「そうでしたここは仕事場でした。私と提督の家じゃなかったわ」

ヲ「当たり前だろ!?!」

海「……」

何がしたいのだろうこの人達は？

アオイが行動できないままいると今度は小さな
4人組がアオイを見てきて

暁「娘さんじゃないの？」

海「……そうね」

響「司令官とはずっと一緒だったのかい？」

海「ちがう。」

雷「スリーサイズは？」

海「……え？」

雷「スリーサイズよスリーサイズ！」

海「聞こえて入るわ。でもなんでそれを聞くのかが分からないの。」

雷「初対面の女の子に聞くことと云えばこれでしょ？」

海「どこの常識よ」

雷「で？で!!？」

すつごい迫ってくる……ユウキ助けて

電「やめるのです雷お姉ちゃん……」

迫つて来ていた子の後ろにいたおとなしそうな子が慣れたようにさとし

海「ありがとう…助かったわ」

電「いえ…うちの姉がご迷惑をかけましたなのです」
すごい語尾ね…かわいい

雷「電だつて気になるでしょ？娘じゃないならライバルなわけだし！」

電「いちいち抱きつかないでください！恥ずかしいのです」
何かイチヤイチャし始めた…アオイもあとであれやろう。
効果的っぽい

浜「ここにいたのね。」

いきなり扉の方から声がしたので見てみると

…えつとハマカゼがいた。

浜「あまり勝手な行動はやめてください。」

そう言う腕を強くつかみ引つ張られ

浜「あなたがたもやめてください。迷惑です」
そう言うと扉を締めた

その後ユウキの部屋に連れていかれた。

結「……戻ったか。まったくあいつらは」

慣れているのだろう笑いながら言い

浜「笑い事ではありません。本部に報告します。」

結「勘弁してくれ……」

海「勘弁してあげて？」

浜「あなたが原因ですからね？…今回だけですよ。」

結「ほ……。」

浜「しかし考えてください。海色さんの意志とは関係なく……」

結「分かってるよ。大丈夫だ」

そう言つてユウキはアオイの頭を撫でた。